

文通でつながる家族との絆

重症看護について勉強していたときに「集中治療室における家族看護」といった内容を見かける機会があった。コロナが流行してから入職した私は面会禁止の状況しか知らない。そのため「家族看護」を意識する機会が少なかったように思う。そんな私が今年一番「家族看護」を意識した患者さんとの関わりについて振り返りたいと思う。

Aさん 50代男性。前医で急性心筋梗塞の診断を受けた。心臓カテーテル術を繰り返し実施したが再還流が得られず酸素化も悪化し、挿管され手術目的で当院に搬送となった。

初めて受け持ちをした日は、術後2日目だった。Aさんはまだ挿管中であつた。この日は抜管を目指してしたため、鎮静剤を減量している段階であつた。Aさんは声をかければ開眼しコミュニケーションを図れる程度に意識はあり、呼吸器の設定もさげることができていた。Aさんは意識が徐々にしっかりしてきたようで、自分が手術したことを思い出していた。そのためか、身振り手振りで私に何か伝えようとされていた。ボードに文字を書いてもらったところ、「いのちは助かったのか」と書かれた。その言葉で私は、Aさんの記憶は、転院前で時間が止まってしまっていることを理解した。気管チューブが挿入されて苦しさもある中で、死の恐怖を感じながら必死に伝えてくれた言葉だった。私は手術が成功したことや、呼吸器からの離脱を図っている現状を説明した。少しでもAさんの不安や恐怖が和らぐように声をかけ、積極的にコミュニケーションを図った。午後には採血データも改善し抜管できた。抜管後「あなたのおかげで快適に過ごせているよ。ありがとう」と言葉をかけていただいた。Aさんからは、笑顔や前向きな発言があり、私はとても嬉しかった。

Aさんは私に、家族の話をしてくださった。特に大学生の娘さんについては、笑顔でうれしそうに話してくださった。そんなAさんに術後ご家族から預かった手紙や写真を渡すと、喜ぶと同時に涙された。手紙を読み、嬉しい反面、養っていかねばならない家族がいるにも関わらず、父親としての役割を果たせるのか不安に思っているのだろうか、患者さんの涙の理由について心のうちを慮った。また、いつ自分がどうなってもおかしくない状況だったことへの恐怖、突如自身に降りかかってきた病を受け入れなければならない状況など、涙には様々な感情があるように見えた。涙されているAさんに、私は家族へ手紙を書くこと提案した。文通の提案は、コロナ禍で面会できない家族と患者さんの間をつなぐという目的だけではなく、文通することで患者さんの不安を少しでも減らすようにすることで、せん妄予防にもなると考えたためだった。提案するとAさんは、目をきらきらさせて手紙を書き始め、A4用紙2枚いっぱいにしたためた。書き終えたあと、Aさんの顔は満足感で溢れていた。家族に手紙のことを伝えると、病院まで受け取りに来てくださった。



当病棟は、予定手術の患者さんだけでなく緊急入院も多く、重症部門特有の環境からも患者さんは不安を抱えやすいと思う。またコロナによる面会制限が続くことに加え、スマートフォン等の電子機器の使用制限もある。一般病棟よりさらに不安やつらさ、恐怖などの負の感情に囚われやすい環境にある。今回Aさんと関わり、Aさんの表情や言動から、自分のおこなった看護が間違っていなかったと自信をもつことができた。私はこれからもこのような環境にある患者さんの不安を少しでも軽減できるような関わりを行い、患者さんが前向きな気持ちで、病と向き合えるよう支援をしていきたい。

